サイゼリヤの絵画をめぐるバズ

山田晴通

2017年3月、Twitterのあるツイートが「バズった」、つまり、ちょっとした話題になった[1]。

> サイゼで泥酔したオッサンが店員に「あなたの店で飾られている絵、本当に美しいですね。美しい絵に美味しい食事…素晴らしい……」とか話しかけてて、周りの客失笑してたんだけど俺は何故かスゲぇ感動して泣きそうになってた。

サイゼリヤの店舗に「飾られている絵」というのは、本物の絵画でも、模写でも、複製画でもなく、壁面や天井用のプリントされた壁紙(クロス)でしかない。ただし、それぞれの「絵」は額縁に入っているか、額装されているかのような印象を与える枠で囲まれている[2]。

これを起点として、芸術における複製、あるいは芸術の商業利用といった議論を展開することも可能だが、ここではそうした方向には進まない。この小論の課題は、大衆的なイタリア料理店チェーンの店舗の内装という限界的な形態とはいえ、「泰西名画」的な作品のイメージに身近に接する機会となっているサイゼリヤの店舗で見られる絵画について、どのような日本語の言説がインターネット上に存在しているのか、という現状の把握である。

なお、以下の本文や注記において、ネット上の文章は引用に際して改行を無視している。また、図示する画像は、いずれもパブリック・ドメインにあるとしてWikimedia commonsに置かれているものを加工して用いており、実際にサイゼリヤの店舗にある画像とは多少の異同があり得る。キャプションに記したファイル名は、Wikimedia commonsのものである。

1. Googleによる「サイゼリヤ」と「絵」のand検索の結果

Googleを使って、「サイゼリヤ」と「絵」をand検索にかけると、最上位は「サイゼリヤ の画像検索結果」が示され、その次に、アートテラー・とに〜のブログ「アートテラー・とに〜の【ここにしかない美術室】」の2017年8月17日付の記事「サイゼリヤで使える美術講座」が表示される[3]。これは、「アートテラー」と称し、美術関係の蘊蓄をネタとする芸人が、「今回は、そんなサイゼリヤでの食事中に、さりげなく口にすると、一目置かれるかもしれない(ウザがられるだけかもしれない)名画の蘊蓄をご紹介いたしま

す。」として、サイゼリヤの店内にある絵画を解説しながらギャグを挟んでいく記事である[4]。

サイゼリヤにある複数の絵を紹介しているページは、Google での検索結果の概ね上位2ページ＝40件の範囲で、この記事も入れて5件ある[5]。他の4件は、とに〜の記事より早いものが2件、後のものが2件で、最も早いのは、追加分も含め絵画8点を取り上げている「フリーランスＷＥＢ屋」と称する光庵のブログ「サイゼリヤのルネサンス絵画」(2009年4月12日付)である[6]。

kotetsu1968 による NAVER まとめ「なんか見たことあるなぁ ?! サイゼリヤのルネッサンス絵画」(2012年8月20日付)は、7点の画像と簡単な紹介をまとめている[7]。とに〜の記事より遅いものでは、オンラインメディア BuzzFeed のエディターである鳴海淳義による記事「サイゼリヤ店内の絵画と、日本人が感じる「イタリアっぽさ」の関係」(2018年2月10日付)が、「16世紀の美術史観を受け継いでる？」と副題を掲げ、サイゼリヤの絵の代表例4点に言及した上で、ヴァザーリをおもな研究対象とする若手美術史研究者で(古川, 2019)、壺屋めり名義で一般書(壺屋, 2018)も手がけている古川萌(記事中では「めりさん」)の踏み込んだ内容のコメントを紹介している[8]。古川のコメントに画像は追加されていないが、コメントの中では作品8点が言及されている。Twitter の「サイゼリヤ非公式 @muritotoi」の2019年2月13日付のツイート「美術概論の授業で本日私が発表した内容です(一部) …」は、「25店舗119絵(ママ)で14種類の絵画が使われていることがわかった」とし、添付された画像からは、そのうち13点が具体的に確認できる[9]。

以上、5件のページで言及されている作品を一覧すると、言及されている作品で、実際に店舗に存在すると判断される作品は、延べ15点に及ぶ。15点のうち、ラファエロの『魚の聖母』と『聖体の論議』、アレクサンドル・カバネルの『ヴィーナスの誕生』は、それぞれ1件しか言及がないが、これらはいずれも、店舗での使用例がネット上の写真画像で確認できる[10]。なお漏れがある可能性は残るが、使用頻度の高い作品は、この15点で網羅されていると考えて差し支えないだろう[11]。**[表1]**

なお、検索結果ではずっと下位になるが、同様の記事として最も早い時期の例と思われるのは、駅名標ラリーが趣味の理学博士と称する人物による「くりこみさん日記」という個人ブログの記事である[12]。2008年12月5日付の記事「12/05：サイゼリヤの店内にある絵について」では、「サイゼリヤの店内には、いろいろな絵画があります。で、作者と作品名が誰で何なのかが気になり、ネットで調べました。」として「ラファエロ作『天使たち』」への言及がある[13]。続いて、翌々日の「12/07：サイゼリヤの店内にある絵について その2」では、「まず、前回紹介した、ラファエロ作『天使たち』。続いて、ブーグロー作『ファーストキス』。それから、ボッティチェリ作『春』。そして、ボッティチェリ作『ヴィーナスの誕生』。」とある[14]。ここでは『天使たち』が『システィーナの聖母』の部分であることや、ブーグローの作品名の当否[15] についての言及はないが、これはその時点におけるネット上の情報の限界を反映しているのであろう。

表１　関連ページの記事における各作品への言及

作品名(画家)	光庵	NAVER	とに〜	BuzzFeed		S非公式
受胎告知(フラ・アンジェリコ)	○	○	○		△	○
夫婦の間 天井画(マンテーニャ)					△	○
受胎告知(ダ・ヴィンチ)	○	○				○
春(ボッティチェリ)	○	○		○	△	○
ヴィーナスの誕生(ボッティチェリ)	○	○	○		△	○
最後の晩餐(ギルランダイオ)	○	○	○		△	○
聖体の論議(ラファエロ)						○
アテナイの学堂(ラファエロ)			○	○		○
アダムの創造(ミケランジェロ)	○	○				
ガラテイアの勝利(ラファエロ)	○					○
システィーナの聖母(ラファエロ)	○	○	○		△	○
魚の聖母(ラファエロ)						○
リュートを弾く天使(フィオレンティーノ)				○		○
ヴィーナスの誕生(カバネル)					△	
アムールとプシュケー（ブーグロー）			○	○	△	○

BuzzFeedについては、記事中に画像を示しての言及があるものに「○」、古川のコメント中で言及されているものに「△」を記入している。

2. 15点の絵画の分類

前節で確認された15点は、ここで個別の紹介は要しないだろうが、中には注意すべき背景のある作品もあり、最低限の注釈は加えておきたい。また、これら15点は様々な観点から分類ができるが、分類を通して見えてくる特徴についても、いくつか確認しておく。[**表２**]

これら15点は、時代と地域によって2つに大きく分類される。すなわち、大部分を占める盛期ルネサンス期のイタリア絵画である13点と、19世紀のフランス絵画である2点である。サイゼリヤはイタリア料理店であり、前者は自然だが、後者はどうであろう。前述のアートテラー・とに〜の記事には、カバネルの『ヴィーナスの誕生』への言及はないが、イタリア絵画の中にブーグローが1枚だけ紛れていることを、サイゼリヤの定番メニューにフランス料理を思わせる「エスカルゴのオーブン焼き」があることに準えている。

画家に注目すると、ラファエロが5点と全体の1/3を占め、次いでボッティチェッリが2点あるほかは、8人の画家が各1点となっている。それでは、13点と大部分を占めているルネサンス期の作品は、イタリアの盛期ルネサンスを代表する作品と考えてよいのだろうか。専門的な評価とは別に、ネット上でどのような画像が「ルネサンス」なり「ルネッサンス」と結び付けられているのかを展望するため、様々なキーワードでGoogleの画像検索を試みた[(16)]。Googleの画像検索では多数のヒットがあった場合、最初のページには

表２　各作品の制作年など

作品名(画家)	制作年	画面	有翼の人物
受胎告知(フラ・アンジェリコ)	1440-1450	全体	大天使(ガブリエル)
夫婦の間 天井画(マンテーニャ)	1465-1474	全体	プット(複数)
受胎告知(ダ・ヴィンチ)	1472- c.1475	全体	大天使(ガブリエル)
春(ボッティチェリ)	c.1482	全体	ゼピュロス、エロース
ヴィーナスの誕生(ボッティチェリ)	1483-1485	全体	ゼピュロス
最後の晩餐(ギルランダイオ)	c.1486	全体	(なし)
聖体の論議(ラファエロ)	1509	部分	智天使(複数)
アテナイの学堂(ラファエロ)	1509- c.1511	全体	(なし)
アダムの創造(ミケランジェロ)	c.1511	全体	(なし：創造神など*)
ガラテイアの勝利(ラファエロ)	1509-1512	部分	エロース(複数)
システィーナの聖母(ラファエロ)	1513-c.1514	部分	智天使(複数)
魚の聖母(ラファエロ)	c.1514	部分	大天使(ラファエル)
リュートを弾く天使(フィオレンティーノ)	1521	全体*	プット(智天使？*)
ヴィーナスの誕生(カバネル)	1863	部分	エロース(複数)
アムールとプシュケー（ブーグロー）	1890	部分	エロース、プシューケー

＊については、本文中の関連する記述に注意。
制作年が資料により様々である作品については、おもにイタリア語版と英語版の Wikipedia の記載を優先しているが、あくまでも時期の目安であり、厳密なものではない。

400 点ほどの画像が示されるが、その中にはノイズも、重複も多く、実際に見出される作品のバリエーションはざっと半数以下と見込まれる。

画像検索では、ちょっとしたキーワードの違いや、同じ言葉の組み合わせでも語順(「ルネサンス　絵画」と「絵画　ルネサンス」では結果が異なる)、検索する時期の違いなどで、検索結果はかなり変動する。しかし、13 点の作品の中でも、2 点の『受胎告知』、ボッティチェッリの 2 点と、ラファエロの『アテナイの学堂』、ミケランジェロの『アダムの創造』の 6 点は、キーワードや語順を変えながら試みた画像検索のいずれの場合においても 1 ページ目の上位にヒットし、ネット上の言説において「ルネサンス / ルネッサンス」と強く結びついていることが分かる。また、『ガラテイアの勝利』は、少し順位が下がるが、これらに準じた位置にある。

一方、『システィーナの聖母』は、検索結果によってはヒットしたり、しなかったりという状態であった。また、画面全体はヒットせず、切り取られた画像である『天使たち』だけがヒットする場合もあった。さらに、ギルランダイオの『最後の晩餐』(17)は、ヒットもあったが、ヒットしない場合の方が多かった。残る 4 点、すなわちマンテーニャの『夫婦の間 天井画』、『聖体の論議』、『魚の聖母』、『リュートを弾く天使』はいずれの検索語の場合も 1 ページ目にはヒットしなかった。[**表 3**]

画像検索で必ず上位にヒットする作品 6 点と、全くヒットがなかった 4 点を比べると、サイゼリヤにおける用いられ方は対照的である。前者 6 点は画面全体が用いられ、著名な

表 3　検索語別の画像検索結果の比較

作品名(画家)	ルネサンス＋絵画	ルネッサンス＋絵画	絵画＋ルネサンス	絵画＋ルネッサンス
受胎告知(フラ・アンジェリコ)	○ (14)	○ (5)	○ (3)	○ (7)
夫婦の間 天井画(マンテーニャ)				
受胎告知(ダ・ヴィンチ)	○ (42)	○ (10)	○ (43)	○ (47)
春(ボッティチェリ)	○ (16)	○ (19)	○ (15)	○ (13)
ヴィーナスの誕生(ボッティチェリ)	○ (5)	○ (2)	○ (2)	○ (3)
最後の晩餐(ギルランダイオ)		○ (301)		
聖体の論議(ラファエロ)				
アテナイの学堂(ラファエロ)	○ (28)	○ (20)	○ (27)	○ (15)
アダムの創造(ミケランジェロ)	○ (9)	○ (8)	○ (6)	○ (8)
ガラテイアの勝利(ラファエロ)	○ (62)	○ (90)	○ (94)	○ (286)
システィーナの聖母(ラファエロ)		○ (23)		
(天使たち)	● (370)	● (72)		
魚の聖母(ラファエロ)				
リュートを弾く天使(フィオレンティーノ)				
ヴィーナスの誕生(カバネル)				
アムールとプシュケー (ブーグロー)				

2020 年 1 月 8 日付の検索結果による。
「○」が全体画像、「●」は部分画像のヒットを示す。カッコ内は、1 ページ目における順位。
これらの他、「絵画」ではなく「絵」を検索語とした画像も検索もおこなったが結果は大同小異であり、省略している。

作品として認知されやすい形で提示されているが、後者 4 点は知名度が低く、装飾的な使用例もあり、さらに『聖体の論議』と『魚の聖母』の 2 点は、本来の画面の一部だけを切り取った形で掲示されている。

フランス絵画 2 点も含め、サイゼリヤで使用されている作品群の中には本来の画面の一部だけを切り取ったものが相当数含まれている。画面の縁が切れているという程度ではなく、画面構成自体が異なる印象となるほど一部だけを切り取っているものは、イタリア・ルネサンスの作品だけでも 4 点、19 世紀フランスの 2 点を含めると 6 点あり、作品群の制作年順で見れば後半に集中している。

先に指摘した検索結果の違いを重ねて考えるなら、一般的にルネサンスの代表的作品とされる比較的早い時期の作品が全体画面で使われ、比較的遅い時期の作品が部分的な形で装飾的に使われている、という傾向がある。

ちなみに、後半の作品では例外と見える『リュートを弾く天使』も、元々の制作意図としてはより大きな画面の一部であったことが、近年明らかにされている。実際に、同様の構図を部分に取り込んだ後年のフランチェスコ・ヴァンニによる祭壇画も存在している[18]。**[図 1ab]**

こうした切り取られた作品群に共通するのは、とりあえず「天使」が描かれているとい

図 1a　リュートを弾く天使
Rosso Fiorentino, *Putto che suona*, 1518.
File:Rosso Fiorentino - Madonna dello Spedalingo - Google Art Project.jpg

図 1b　参考：ヴァンニの祭壇画
Francesco Vanni, pala della collegiata di asciano, 1600.
File:Francesco vanni, pala della collegiata di asciano, 1600.jpg

う点である。これについては、次節で改めて検討する。

なお、サイゼリヤに掲げられる画面は幅が 1 メートルを超えることが多く、中には『リュートを弾く天使』のように、本来の画面（高さ 39cm、幅 47cm）よりもかなり大きく拡大されている作品もある。しかし、画面の大きさについては、店舗によっても異なる可能性があり、また、実際に店舗で計測することも困難であるため、本稿では分析の対象としない。

3.「天使」たち

上述の「サイゼリヤ非公式@ muritotoi」のツイートは、「調べてわかった事」のひとつとして「どの店にも必ず天使絵がある」と述べている。残念ながら、日本人の大部分は、西洋の古典文化、キリスト教文化への理解が浅い。例えば「大天使」と「智天使（ケルビム）」の位置づけの違いや、「天使」と「エロース / クピードー」の根本的な違いさえ、了解していないというのが、大方の実際であろう。ましてや、装飾的図像としての「プット」概念についてはほとんど無理解と思われる。ここで言及された「天使絵」は、「有翼の人物が描き込まれた絵」という程度に了解しておこう。

15 点の作品群の中には、「大天使」が描き込まれたものが 3 点（ガブリエルが描かれた 2 点の『受胎告知』と、ラファエルがいる『魚の聖母』）、「智天使」としてプットが描か

れているものが2点(『聖体の論議』、『システィーナの聖母』)、宗教的必然性が提示されていないプットがいる作品が2点(『夫婦の間 天井画』、『リュートを弾く天使』)あり、さらにギリシア(ローマ)神話を踏まえた「ゼピュロス(西風)」を描いたボッティチェッリの2点(『春』、『ヴィーナスの誕生』)と、「エロース(クピードー)」が描かれたものが、「ゼピュロス」と重複する『春』を含めて4点あり、合わせて12点に、何らかの有翼の人物の図像が描かれている。そのうち、「大天使」と「ゼピュロス」以外は、いずれも全裸の幼児(男児)の姿で、広い意味ではすべて「プット」と捉えられる。ここでは、キリスト教色があれば「智天使」、ギリシア(ローマ)神話など古典的世界観が反映されていれば「エロース(クピードー)」、いずれも希薄な、曖昧な装飾的表現であれば(狭義の)「プット」と整理する。いずれにせよ、神格化＝不老不死＝幼児姿という連想が共有されている。

なお、有翼の人物がいない3点のうち『アダムの創造』では創造神とその背景に描かれた数人の人物が、翼はないが中空に描かれており、残る『最後の晩餐』と『アテナイの学堂』が、もっぱら普通の人物群を描いた作品となる。これら3点は、いずれも画面全体がサイゼリヤの壁面を飾っている。[**図2～4**]

有翼の人物が登場する12点のうち、幼児ではなく、大人の姿で描かれる「大天使」や「ゼピュロス」が登場する作品は、5点中4点がサイゼリヤの店舗で画面全体として使用されている。具体的には、大天使ガブリエルが描かれた2点の『受胎告知』と、いずれもゼピュロスが描かれたボッティチェッリの2点である。[**図5～8**]

これに対し、『魚の聖母』は、画面の上の部分を抜き出し、構図から人物を一人だけ除外する形になっている。抜き出した画面には、聖母子と、その右に描かれたヒエロニムス(聖ジェローム)、画面左手の大天使ラファエルの上半身が捉えられている。画面から外された人物は、旧約聖書外典の『トビト記』に登場する少年トビア(トビトの息子)である。もちろん『トビト記』には聖母子は登場しないが、神に遣わされた大天使ラファエルの助けでトビアが悪魔を払い、父の病を癒すというのが物語の筋である。トビアは、物語の鍵となる魚を右手に持っており、それが作品名の由来なのだが、彼はサイゼリヤにある画面からは外されており、彼が持つ魚も画面には登場しない[19]。アートテラー・とに～風に言うなら、「そういえば、サイゼリヤの定番メニューに魚料理はないよね」ということなのだろうか。[**図9ab**]

一方、もっぱら幼児姿の有翼の人物が描かれた作品は、画面全体として使用されている例が、『夫婦の間 天井画』と『リュートを弾く天使』しかなく、残る5点は、有翼の幼児たちの部分を切り出して使用している。このうち、『聖体の論議』の中央部分、『システィーナの聖母』の部分である通称『天使たち』の2点は、「智天使」たちを描いたものであり、残りの3点(『ガラテイアの勝利』と、19世紀フランスの2点)は「エロース」の系譜を引くものである。

時期が最も早い『聖体の論議』は、バチカンの使徒宮殿のいわゆる「ラファエロの間」のひとつを飾る大壁画であるが、サイゼリヤで見られる範囲は、画面の中央で天上界と地

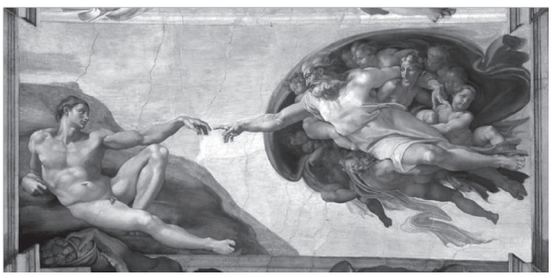

図２　アダムの創造（システィーナ礼拝堂天井画）
Michelangelo Buonarroti, *Creazione di Adamo*, c.1511.
File:Creación de Adán.jpg

図３　最後の晩餐（ギルランダイオ：サン・マルコ国立美術館）
Domenico Ghirlandaio, *Ultima Cena di San Marco*, c.1486.
File:Ghirlandaio, ultima cena di san marco.jpg

図４　アテナイの学堂
Raffaello Sanzio, *Scuola di Atene*, 1509-c.1511.
File:Raffael 058.jpg

図５　受胎告知（フラ・アンジェリコ：サン・マルコ国立美術館）
Fra Angelico, *Annunciation*, 1440-1450.
File:ANGELICO, Fra Annunciation, 1437-46 (2236990916).jpg

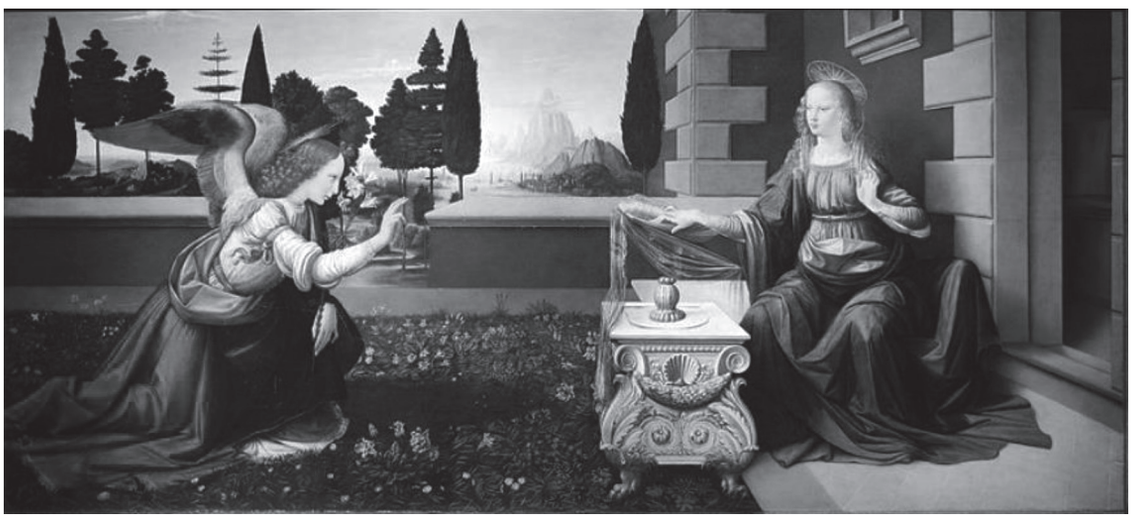

図６　受胎告知（ダ・ヴィンチ）
Leonardo da Vinci, *Annunciation*, 1472- c.1475.
File:Annunciation (Leonardo).jpg

図 7　春
Sandro Botticelli, *La Primavera*, c.1482.
File:Sandro Botticelli-La Primavera-Google Art Project.jpg

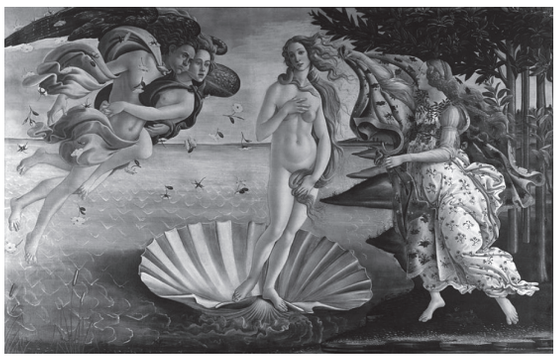

図 8　ヴィーナスの誕生（ボッティチェッリ）
Sandro Botticelli, *La Nascita di Venere*, 1483-1485.
File:Botticelli Venus.jpg

図 9b　魚の聖母（部分）- サイゼリヤ店舗内で見える画面の構図に準じている。以下の部分図はいずれも同様。

図 9a　魚の聖母
Raffaello Sanzio, *Madonna del Pesce*, c.1514.
File:Raffaello Sanzio - Sacra Famiglia con Rafael, Tobia e San Girolamo, o
Vergine del pesce.jpg

上界を分かつ部分、天上界の底に位置する、白鳩の姿に象徴された聖霊の周りで四福音書を翳し示すように開き持つ智天使たちの部分だけであり、画面全体からすればごく限られた範囲でしかない。『聖体の論議』の画面最上部には大天使たちも描かれているが、抜き出されている部分にはプットの姿をした智天使たちしかいない。［**図 10ab**］

『システィーナの聖母』の部分である『天使たち』は、サイゼリヤを象徴する「あの絵」として言及されることがある。例えば、アートテラー・とに〜は、「あの天使の絵って、よくサイゼリヤで目にするけど…」と述べている。また、「デイリーポータル Z」のスタッフ・ライターである藤原浩一は、2017 年 9 月 12 日付の記事「台湾のサイゼリヤの焼きイカがうまい」で、台北のサイゼリヤの店舗に見つけた「あの絵」の写真画像を示し、次のように述べている[20]。

図 10b　聖体の論議（部分）

図 10a　聖体の論議
Raffaello Sanzio, *Disputa del Sacramento*, 1509.
File:Disputa del Sacramento（Rafael）.jpg

何よりも先に目につくのは「あの絵」である。照明も椅子も違うのでややもするとサイゼリヤではなくなってしまうところを、この絵が支えている。サイゼリヤのアイデンティティはあの絵なのかもしれない。

『システィーナの聖母』では、無数の幼児の顔が隠された雲を背景に、雲上に立つ聖母子を中心に、左側に聖シクストゥス（ローマ教皇シクストゥス２世）、右側に下を見遣る仕草の聖バルバラがひざまづいている。彼女の視線の先、画面の中央最下部＝聖母子の真下にプット姿の２人の智天使が、画面の底辺の縁にわずかに描かれたパラペット（胸壁）にそれぞれ両腕を乗せ、聖バルバラに視線を返しているが、この部分を切り取った画像が『天使たち』と通称されて、広く流通している。［**図 11ab**］

旅行情報サイト「GOTRIP!」の旅記者はるぽぽ（Harubobo）は、2018 年 5 月 26 日付の記事「ドイツの古都ドレスデンで「世界で最も有名な天使」たちに対面」で、サイゼリヤへの直接の言及はないが、次のように述べている[21]。

どこか釈然としない表情で思案している様子の２人の天使…この絵に見覚えはありますか？ きっと、「どこで見たのかはわからないけど、どこかで見たことがある」と感じる人が多いことでしょう。この天使たちは、ルネッサンスの巨匠ラファエロが描いた「システィーナの聖母」の一部。もともとの絵画から切り離され、天使たちだけが衣類や切手、文房具等さまざまな商品のモチーフとして使われたことで、「世界で最も有名な天使」といわれるほどよく知られた存在になりました。この天使たちが西洋絵画における天使のイメージを確立したといっても過言ではありません。

一方、「エロース」の系譜を引く作品は３点あるが、『ガラテイアの勝利』とカバネルの『ヴィーナスの誕生』は、サイゼリヤでは、いずれも画面上部に浮遊するプットたちの部分を切り抜いて装飾的に用いられている。プットたちは、『ガラテイアの勝利』では４

図 11a　システィーナの聖母（この画像では、底辺部の胸壁が切れている）
Raffaello Sanzio, *Madonna Sistina*, 1513-c.1514.
File:RAFAEL-Madonna Sixtina（Gemäldegalerie Alter Meister, Dresden, 1513-14. Óleo sobre lienzo, 265 x 196 cm）.jpg

図 11b　システィーナの聖母（部分：通称『天使たち』）
File:DPAG 2012 Block Sixtinische Madonna.jpg

人、カバネルの『ヴィーナスの誕生』では 5 人描かれており、前者は弓矢を持ち、後者はウェヌスとともに描かれているため、いずれもエロース（厳密にはクピードー）と考えられる。しかし、本来エロースは特定のひとりの神であり、ボッティチェッリの『春』の画面中央のウェヌスの頭上にクピードーがひとりだけ描かれているのが、本来の神話世界に即した表現である。複数が群れ飛ぶ姿は、智天使たちの描写からの影響と考えられる。［**図 12ab**］

『ガラテイアの勝利』については、単にプットたちの部分を切り取るのではなく、本来の画面の上部、プットたちだけを切り取って横長の構図となった画面 2 枚分を上下反転させて繋げ、それを天井画として真下から見上げる形とする例がある[22]。さらに、より凝った使い方として、四角い柱に接する天井部分に、柱を囲むように長方形 4 枚を重ね貼り、より正確には横長の長方形の下の隅二つを切り落とした変形の六角形 4 枚を繋げた形で、装飾的に用いている例、さらに同様の配列の中央に（柱ではなく）『夫婦の間 天井画』を嵌め込む形に配置した例もある[23]。また、カバネルの『ヴィーナスの誕生』も、単純な矩形の切り取りではなく、浮遊するプットたちの下に横たわるウェヌスを塗り潰した上で、画面 2 枚分を繋げて天井画とする例がある[24]。カバネルのプットたちは弓矢ではなく、巻貝（法螺貝？）を持っており、もはやエロースとしての性格も希薄である。言うまでもなく、貝は女性器の象徴であり、その示唆するところはウェヌスと一体となった画面では明瞭であるが、ウェヌスと切り離されたサイゼリヤの天井画からは、性的な示唆は除去されている。［**図 13ab**］

『アムールとプシュケー、子供たち』も、ラファエロの『天使たち』と並んでサイゼリ

図 12a　ガラテイアの勝利
Raffaello Sanzio, *Trionfo di Galatea*, 1509-1512.
File:Raphael's Triumph of Galatea 02.jpg

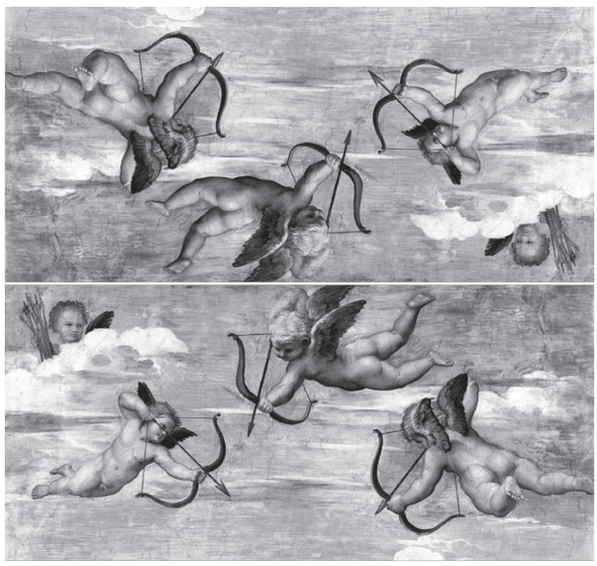

図 12b　ガラテイアの勝利（部分：2 枚分をレイアウトしたもの）
実際に店舗にあるものは、2 枚が一体化するよう境界部分が加工処理されている。

図 13a　ヴィーナスの誕生（カバネル）
Alexandre Cabanel, *La Naissance de Vénus*, 1863.
File:1863 Alexandre Cabanel - The Birth of Venus.jpg

図 13b　ヴィーナスの誕生（カバネル）（部分）
この状態から画面右下のウェヌスを塗り潰した上で、装飾的に用いる。
図 12b と同様に配置されることもある。

ヤを象徴する「天使」の絵とされることがある[25]。ブーグローは、アムール（エロース）とプシューケーの主題について、これを若い成人男女として描いた作品も複数残しているが、そちらではアムールは有翼の青年として描かれ、プシューケーに蝶の翅はない。これらは、神格を与えられる前の人間の娘としてのプシューケーを、エロースがさらう図である。［**図 14ab**］

一方、『アムールとプシュケー、子供たち』ではプシューケーに蝶の翅が描かれており、両者が結ばれ、プシューケーが神格化された後の姿を敢えて幼児として描いている。サイゼリヤでも見られる、元々の画面の上部を横長に切った構図は、幼児の姿とはいえ全裸で抱擁する男女の下半身、それも嫌がる女性に男性が抱擁を強いているかの様な姿を隠し、

図 14a　参考：プシュケーとアムール
William-Adolphe Bouguereau, *Psyche et L'Amour,* 1889. File:Psyche et LAmour.jpg

図 14b　参考：プシュケーの誘拐
William-Adolphe Bouguereau, *Le ravissement de Psyché,* 1895. File:Psycheabduct.jpg

図 14c　アムールとプシュケー、子供たち
William-Adolphe Bouguereau, *L'Amour et Psyché, enfants,* 1890. File:Bouguereau first kiss.jpg

図 14d　アムールとプシュケー、子供たち（部分）

図 15a　夫婦の間　天井画
Andrea Mantegna, affresco della Camera degli Sposi del Palazzo Ducale di Mantova, 1600.
File:Andrea Mantegna-Ceiling Oculus - WGA14023.jpg

性的、暴力的な示唆を、極力排除しようとするものである。[**図 14cd**]

複数のプットたちを描いた作品で、唯一、画面全体がサイゼリヤに飾られているのが、ディ・ソット・イン・スー（di sotto in sù）の典型例とされるマンテーニャの『夫婦の間 天井画』である。眼窓（オクルス）の上に 5 人の女性と 10 人のプットたちがいて、女性たちの一部は、こちらを見下ろしている[26]。この作品には、キリスト教的な色彩も、神話的な背景もなく、そこに描かれた有翼の幼児たちはプットとしか言いようがない。[**図 15**]

まとめ

以上を整理すると、サイゼリヤの店舗を飾る絵画作品群は、画面全体が提示されるイタリア・ルネサンスを代表する作品群と、もっぱら「天使」に見える有翼の幼児＝広義のプットの姿が描かれた部分を抜き出して装飾的に用いた作品群のふたつに大別され、両者の間には中間的な性格の作品がある。前者の典型は、2 点の『受胎告知』、ボッティチェッリの 2 点、『最後の晩餐』、『アテナイの学堂』、『アダムの創造』の 7 点であり、後者の典型は、『聖体の論議』、『システィーナの聖母』、『ガラテイアの勝利』、19 世紀フランスの 2 点の合わせて 5 点である。残る 3 点のうち、『魚の聖母』は、画面が切られてはいるが前者寄り、『夫婦の間 天井画』と『リュートを弾く天使』は、画面全体が用いられているが後者寄りと見える。[**表 4**]

「サイゼリヤに飾ってある絵って、結構ガチめな絵が多いですよね。」といった、本格的な作品が多いという印象は、もっぱら前者が支えている[27]。他方では、本物の作品を鑑賞する機会に恵まれた者が、「サイゼリア(ママ)の壁なんて言わないで！涙」とコメントする例があるほど、ルネサンスの代表作品がサイゼリヤを連想させるという事態も生じている[28]。

先に言及した BuzzFeed の鳴海淳義は、サイゼリヤの絵について「どのような観点でこれらの絵が選ばれたのだろうか。」と問うた上で、「BuzzFeed はサイゼリヤで食事をするときの楽しみの 1 つである店内絵画について、誰がどんな基準でセレクトしているのか同社広報に数ヶ月にわたって問い合わせているが、まだ回答は得られていない。」と記している[29]。この記事は、続けて「めりさん」＝古川萌にコメントを求め、彼女は「おそら

表４　サイゼリヤの絵画の分類

	代表的作品	装飾的使用
全体画面	**受胎告知**(フラ・アンジェリコ) **受胎告知**(ダ・ヴィンチ) **春**(ボッテイチェリ) **ヴィーナスの誕生**(ボッティチェリ) 最後の晩餐(ギルランダイオ) **アテナイの学堂**(ラファエロ) **アダムの創造**(ミケランジエロ)	*夫婦の間　天井画*(マンテーニヤ) *リュートを弾く天使*(フィオレンティーノ)
部分画面	魚の聖母(ラフアエロ)	*聖体の論議*(ラファエロ) システイーナの聖母(ラファエロ) ガラテイアの勝利(ラファエロ) *ヴィーナスの誕生*(カバネル) アムールとプシュケー（ブーグロー）

太字は画像検索で上位となる６点、下線斜体は画像検索でヒットしない４点

くサイゼリヤとしては、「イタリア」をイメージしやすい店内装飾として、イタリア絵画をインテリアに取り入れているのだろうと思います」とした上で、ヴァザーリの『列伝』に言及しつつ、取り上げられた作品がフィレンツェを中心とした中部イタリアに偏っていると述べ、さらに続けて次のようにも指摘している。

「また、19 世紀の絵画もちらほら見られます。ブーグロー《クピドとプシュケー》やカバネル《ヴィーナスの誕生》といった 19 世紀フランスの画家たちの絵画もときどき飾られているようです。彼らの絵画は、プットー(裸の子供の姿をした天使)やクピド(キューピッド)のいる場面が積極的に採用されているように思います。ルネサンス絵画のほうもプットーたちのいる場面が多く使われていますし、そうした主題からの選択も考慮されているのかもしれません。」

本稿における検討は、古川が直観的に正しく指摘していた内容を、具体的に裏付ける作業でもあったということである。

本来、絵画など、美術の鑑賞は、それ自体がコンサマトリー（自己充足的)な行為であるはずだ。もちろん、作品の技法を分析的に学び取ろうとしている画学生や、何らかの美術の試験に合格するため画像に目を通して記憶しようとしている学生にとっては、その行為はインストゥルメンタル(手段的)な側面が強いだろう。しかし、多くの鑑賞者にとって、美術館に出向く行為は、それ自体に充足感を見出すコンサマトリーなものである。

では、サイゼリヤに身を置くとき、壁紙の絵画に目をやるのはどうか。私たちはその壁紙を見るためにサイゼリヤに出向くわけではない。また、単に空腹を満たすためだけに席

につくわけでもない。私たちは、半ば無意識のうちに、壁紙という限界的な形ではあれ「「イタリア」をイメージし」、供される食事に、単に空腹を満たす食品という以上の意味を感じ取ろうとしているのであり、料理を美味しく食べるため、あるいは、食事の時間を豊かに過ごすために、いわばインストゥルメンタルに店の雰囲気に浸ろうとしてこうした装飾を見ているのではないか。店の側はそのような客の心理を誘導する演出として、「店の雰囲気に合せて」作品を選び、必要な画面の加工をしているのであろう。

それでは、「天使」に見えるプットの装飾はどうなのか。「天使」はイタリア文化の占有物ではない。こちらはイタリアのイメージというよりも、客をリラックスさせ、和やかな気分に、笑顔にさせる演出であろう。であればこそ、19 世紀フランス絵画で構わないのであり、他方では、性的な示唆は除去されるのである。客は店内に、自分の席の身近に、プットを見出し、それが智天使かエロースかといった面倒な問いなどは思いもよらず、その愛くるしさに気持ちを柔げ、食事に臨むのである。これも食事を楽しむためのインストゥルメンタルな面の強い行為であろう。

しかし、それらが客の中で結合して化学反応を起こしたときに、冒頭で紹介した「泥酔したオッサン」の(最初のツイートに反応した別のツイートにある言葉を使えば)「センス・オブ・ワンダー」も生じるのであろう。「オッサン」を笑うことは容易だが、そこで生じるケミストリーにコンサマトリーな感動を見出している彼には、側から何を言っても無意味であるし、勘違いが含まれていようが何であろうが、結果として純粋な感動が誰かに生じたことの意義は、きちんと議論されるべきであろう。これは、その状況をツイートした人物の感動についても同様だ。

さて、サイゼリヤの絵画について、ネット上には、元も子もないような説明の言説もある。それは、絵画の選択が「社長の趣味」だとするものである。サイゼリヤは障がい者雇用に積極的な企業として実績がある。ネット上には、障がい者雇用関係団体の関係者が、サイゼリヤの吉川工場の見学に出向いた際のレポートが公開されており、そこでは、店舗内のみならず事業所の内部にも多数の絵画が飾られていることが述べられ、「イタリアンのお店らしく、社内にはイタリアの絵が沢山飾られていました。また社長のご趣味でもあるそうです。」と記されている[30]。「真実」などというものは、所詮は「藪の中」なのであろう。

注

（1）「VAMPIRE ✞ HUNTER™ @drug_on_slayer」名義で、「2017-03-2923:54:14」に投稿されたツイートであるが、その後、アカウント自体が消滅している。このツイートを起点とするやり取りは、多数のサイトに転写されているが、ここでは、togetter.com の次のページを参照している。https://togetter.com/li/1095693

（2） 壁画制作などを手がける多摩工房のサイトにある記事「壁画？！絵画？！コンセプトのためのインテリア！－サイゼリヤ編」には、「そしてよく見てみると絵画の周りには木でできた額縁が付いていますよ！！絵画の部分はプリントしたものであろうかと思います。これだけであれば壁画にカテゴライズしても良さそうなんですが、そこにプリントではない実物(木製)の存在

感を持った額縁がきちんと付いているのでしっかりとした「絵画」の体系を取っていますね。」(http://tamakobo.com/hekiga-kaiga-concept-interior/)とある。筆者が実見した店舗でも、国分寺北口店や三鷹駅南口店が白い木製の額縁を用いていた。なお、三鷹駅南口店は、絵画のほか、イタリアを思わせる町並みの風景写真もインテリアに多用しており、他の一般的な店舗とは少し趣が異なっている。

また、府中西府店では、この枠は大理石を模した模様が施されたプラスチック材でできており、この部材は内装の他の部分でも汎用されている。他にも多様な形態があるものと思われる。

(3) この検索結果の最終確認は、2020年1月8日。検索は2018年夏以降、何回もおこなったが、ここで記述している範囲の内容は一貫して変わらなかった。

(4) https://ameblo.jp/artony/entry-12302293546.html

(5) Google検索では3ページ目、4ページ目には同様の記事が見当たらず、特定の絵への言及や、キッズメニューの間違い探しに言及した記事など、本稿の関心からはノイズばかりになる。

(6) http://kouyooo.blog95.fc2.com/blog-entry-52.html

ただし、紹介されている画像のうち、フラ・アンジェリコの『受胎告知』は、誤ってサン・ジョヴァンニ・ヴァルダルノの大聖堂付属美術館(Museo dellabasilica di Santa Maria delle Grazie)蔵の作品の画像になっている。実際にサイゼリヤにあるのは、サン・マルコ国立美術館(Museo nazionale di SanMarco)蔵の作品である。

(7) https://matome.naver.jp/odai/2134451698273813801

『受胎告知』についてはダ・ヴィンチとフラ・アンジェリコ(サン・マルコ)の画像を示し、「サイゼリヤに飾ってあったのはこっちかな?…それともこっち?」と書いているが、実際には両方が使われている。

(8) https://www.buzzfeed.com/jp/narumi/saize-picture

記事中では「美術史研究者のめりさん」のTwitterアカウント(壺屋めり@cari_meli)へのリンクがあり、そのプロフィールには「駆け出しイタリアルネサンス美術史研究者。研究対象はヴァザーリでござーり。なお本名は古川萌のもよう。研究業績はResearchmapでね」と二つの名義が紐付けられている。

(9) https://twitter.com/muritotoi/status/1095594093604888576

(10) ラファエロの2作品のうち、『魚の聖母』はYahoo! 知恵袋の2017年4月26日付の質問「サイゼリヤの絵の名前を教えて下さい。」(https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q14173444814)、『聖体の論議』はYahoo! 知恵袋の2010年5月22日付の質問「この、サイゼリヤの壁にかかっている絵画の名前を教えてください。」(https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1441184079)、および、個人ブログ「超・珍獣様のいろいろ」の2016年9月20日付の記事「サイゼリヤに飾られてる絵を勝手に解読する」(http://www.chinjuh.mydns.jp/wp/20160920p5488)、また、カバネルの『ヴィーナスの誕生』は、個人ブログ「印象派画家の勘違い」の2015年4月16日付の記事「サイゼリヤにあった「最後の晩餐」は、ダビンチじゃなくギルランダイオ作でした。」に店舗での使用状況の写真画像がある(http://shiro-to-monet.blog.jp/archives/2026129.html)。

なお、『魚の聖母』は『聖家族と聖ラファエロ』ともいい、所蔵するプラド美術館のサイトでも「Sagrada Familia con Rafael, Tobías y San Jerónimo, o Virgen del pez」と表記されている(https://www.museodelprado.es/coleccion/obra-de-arte/sagrada-familia-con-rafael-tobias-y-san-jeronimo/aec8373f-f502-4095-9c8f-d61b8b2fffc1)。ここで画像を確認したYahoo! 知恵袋の記事でも、回答者は「ラファエロ・サンティ 聖家族と聖ファエロ、又は魚の聖母でしょう。本物はプラド美術館にあります。」と答えている。しかし、この画面にはヨセフは描かれておらず「聖家族」は誤解を招くものと思われるので、本稿では『魚の聖母』とする。

(11)　2020 年 1 月 3 日に Google での検索結果の 5 ページ目＝上位 100 件の範囲を点検したが、1 点だけ、ないし少数の作品についてサイゼリヤにある作品として言及している記述のうち相当数は、実際にはサイゼリヤには存在しない作品について存在するかのように言及していたり、存在する作品の画像を加工したいわゆる MAD 画像であり、記述自体がジョークというかフェイクであった。また、妥当と思われる記述で、15 点以外の絵画作品を取り上げている例は見当たらなかった。

(12)　このブログは現在も継続されている（https://blog.goo.ne.jp/kurikomisan）。2020 年 1 月 3 日に Google で and 検索をしたところ 7 ページ目でヒットした。

(13)　https://blog.goo.ne.jp/kurikomisan/d/20081205

(14)　https://blog.goo.ne.jp/kurikomisan/d/20081207

(15)　ここで『ファーストキス』として言及されているブーグローの作品は、『アムールとプシュケー、子供たち』のことである。『First Kiss』は、この作品についての誤解から始まった通称とされる。誤った制作年次とこの名称による言及があるサイトの例（http://www.ibiblio.org/wm/paint/auth/bouguereau/）。

(16)　「ルネサンス」と「ルネッサンス」を基本とし、これに「絵」、「絵画」、「画家」など検索語として前後いずれかに追加し、and 検索をおこなった。表 3 には 2020 年 1 月 9 日におこなった「絵画」を前後いずれかにつけるという形での検索の結果だけを示しているが、他の場合も結果は大きく変わらなかった。

(17)　ドメニコ・ギルランダイオ作とされる『最後の晩餐』は 3 点が知られており、それぞれ 1480 年、1482 年、1486 年頃の制作とされるが、サイゼリヤで使用されているのは、最後に制作された、フィレンツェのサン・マルコ修道院、現在のサン・マルコ国立美術館の壁画である。この作品は、もうひとつの 1482 年制作のオンニッサンティ教会（Chiesa di Ognissanti）の壁画と構図が酷似しているが、テーブルの両端における使徒の着席の描写と画面上部の背景となっている屋外の風景、手前に描かれた猫の有無などに違いがある。

(18)　フィオレンティーノより 70 年ほど後の時代を生きたヴァンニは、1600 年頃にアシャーノの聖アガタ協同教会（Collegiata di Sant' Agata）のために祭壇画を制作し、画面下中央やや左にリュートを弾く智天使を書き込んだ。これは『リュートを弾く天使』が、独立した作品としてウフィツィのトリブーナに収蔵された 1605 年の直前であった。ヴァンニがフィオレンティーノを参照したことは明らかであるが、彼が参照できたのが、切り分けられる前の全体像だったのか、切り分けられ、単体の絵画とされて以降だったのかは判然としない。

(19)　切り取られた画面の下限は、幼子イエスをくるぶし近くまで入れるよう設定されており、より厳密に述べるなら、少年の金髪の頭頂部が写り込む形になっている。しかし、原画の構図を承知していなければそれが人物の頭頂部とは分かりにくく、切り取られた画面だけを見ると、天使の衣装の一部（袖口？）のように見える。なお、このサイゼリヤに見える構図での切り取り方は、サイゼリヤ独自のものではなく、同じ形で切り取った横長の構図に加工したものを販売しているサイトも複数存在する。

(20)　https://dailyportalz.jp/kiji/170912200639

(21)　https://gotrip.jp/2018/05/85324/

(22)　西葛西駅店の写真画像が、食べログで紹介されている。
（https://tabelog.com/tokyo/A1313/A131305/13072634/dtlphotolst/5/smp2/）

(23)　柱を囲む例は、「デイリーポータル Z」の 2009 年 4 月 19 日付の記事「デスクをサイゼリヤっぽくする」に画像がある。
（https://backnumber.dailyportalz.jp/2009/04/19/a/2.htm）
『夫婦の間 天井画』を嵌め込んだ例は、個人ブログ「Garden Library」の 2016 年 2 月 1 日

付の記事「「サイゼリヤ」のプチフォッカ」にイオンモール千葉ニュータウン店の画像がある。（http://gardenlibrary.blog43.fc2.com/blog-entry-640.html）

(24)　注 10 で言及した記事「サイゼリヤにあった「最後の晩餐」は、ダビンチじゃなくギルランダイオ作でした。」を参照。

(25)　例えば、タレント春名風花は、2017 年 10 月 4 日付のブログ記事「天使の日 ๑❤๑」で、この作品をサイゼリヤと同じ様な構図で切り取った画像について、「ぼくんちには昔からサイゼリヤに飾ってあるのと同じ天使の絵があります。」と言及している。（https://lineblog.me/harukazechan/archives/672473.html）

　また、ネット・オークションなどで、この画像のプリントなどが出品される場合には、検索ワードとして「サイゼリヤ」が加えられていることも多い。（例えば、https://page.auctions.yahoo.co.jp/jp/auction/r339304106）

(26)　描かれた女性たち 5 人のうち、ひとりは黒人であり、その隣に描かれたもうひとりとともに、視線の方向は曖昧で、必ずしも下を覗き込んでいるわけでもない印象を与える。別の一隅にいる 3 人の女性たちは、身を乗り出してこちらを覗いているように描かれている。プットたちは、眼窓上の胸壁に開けられた飾り穴から頭や体の一部を出している様子が描かれており、手の先だけが描かれた者も入れると 10 人いるが、下を見下ろす者はおらず、真下に顔を向けているひとりは目を瞑っている。

(27)　個人ブログ「サラリマヌスのさじは投げられた。」の 2019 年 5 月 11 日付の記事「サイゼリヤで”古代ローマ料理”が食べられる…？」にある『アテナイの学堂』への言及に続けたコメント。（https://salarimanus.com/1063/）

(28)　個人ブログ「HANA NO MIYAKO」の 2015 年 6 月 5 日付の記事「サイゼリアの壁なんて言わないで涙 - 夢のフィレンツェ①」にある、ボッティチェリの『ヴィーナスの誕生』への言及。（https://hananomiyakoblog20140911.tumblr.com/post/120785525767/ サイゼリアの壁なんて言わないで涙 - 夢のフィレンツェ①）

(29)　「サイゼリヤ非公式 @muritotoi」も、同様の照会を試みたようで、電話をかけたところ「店の雰囲気に合せて選んでおります」とだけ回答されたと述べている。筆者も、本稿の準備段階で、サイゼリヤの PR 関係部局への背景情報の照会を試みたが、個人からの問い合わせには応じていないとして、いっさい回答は得られなかった。

(30)　一般社団法人グリーンノートによる「重度障がい者社会支援フォーラム」の 2019 年 2 月 15 日付の記事「サイゼリヤ見学レポート」。（https://aitunag.com/201900212-1/）

文献

壺屋めり（2018）：ルネサンスの世渡り術，芸術新聞社，120ps.

古川萌（2019）：ジョルジョ・ヴァザーリと美術家の顕彰：16 世紀後半フィレンツェにおける記憶のパトロネージ，中央公論新社，294ps.

〔謝辞／献辞〕

高橋達史先生は、1996 年に青山学院大学文学部へ移られる前には、東京経済大学で専任教員として教鞭を執られていた。小生が現在の本務校である東京経済大学に着任したのは 1995 年で、１年間は共通教育センターという教養教育を担う部局で同僚であった。わずか 1 年間しか同僚ではなかったわけだが（事実関係を確認するまで、もっと長かったように思い込んでいた）、先生には職場の先輩として教えていただくことが多々あった。

実は、先生が小生にお声をかけてくださったことには、背景があった。東京経済大学への採用が決まり、初めて先生とお話をしたときより数年前の1990年代前半、まだ前任の短期大学に勤務していた小生は、非常勤講師として出講していた明治学院大学戸塚キャンパスの講師控室で、高橋裕子先生とおしゃべりをする機会がよくあった。専門分野はまったく違っていたが、同じく英国に関心をもつ者として、裕子先生には、いろいろ可愛がっていただいた。おそらく、面白がっていただいたという方が正確だったように思う。達史先生に初めてお目にかかったときも、「山田君のことは家内からいろいろ聞いていますよ」とお声をかけていただき、一挙に先生との距離が近づいた感じがした。

その後、先生が青山学院大学へ移られてからは、裕子先生の1998年の『イギリス美術』には読者として接したものの、しばらく特段のご縁はなかったのだが、2003年に音楽史担当の非常勤講師となって以降は、様々な懇親会の席で達史先生とお話をする機会がしばしばあり、楽しい時間を共有してきた。こうした形で、同僚であった先輩と接する機会がもてたのは、達史先生だけである。

かつてケネス・クラークは「The Artist Grows Old」というフレーズを生んだが、それに倣えば「The Art Historian also Grows Old」とも言うべきであろう。ただしここでは、クラークよりも楽観的、積極的な含意で、新たな境地で物を見るといった意味でこの言葉を使いたい。奥様共々ご縁をいただいたことに感謝し、御退職後もお二人揃って御健勝で、新たな境地で御健筆を振るわれることを祈念しつつ、甚だ拙いものではあるが、本稿をお二人に献呈し、ご厚誼に深く感謝を申し上げる次第である。多謝。